

レジャー・レクリエーションの視点でみる 社会福祉法人の施設運営における“家族化”の意義

○鈴木秀雄
〔関東学院大学〕

宮本雄司
〔早稲田大学〕

鈴木英悟
〔函館短期大学〕

劔持 武
〔中原苑〕

水戸部北斗
〔中原苑〕

“家族化”の意味のひもとき

介護に携わるとき、介護する人とされる人との関係が、家族であるか否かで大きな異なりを生じてくる。基本的に家族とは、夫婦とその血縁者を中心に構成され、共同生活の単位となる集団の形態と理解できる。だからこそ、家族での介護には、二つの異なる側面が顕著になってくる。一方で、痒いところにまさに手が届くように、愛情豊かな介護活動も生ずれば、他方で、家族であるからこそその人それぞれ別の役割(仕事、学業、家事等)を有していることから、介護だけに専念できないことや、家族であるが故のお互いのわがままなども生じてしまう。現在は、介護が社会化され、家族・身内だけの介護から、専門職も多岐にわたり制度化され、家族(血縁)関係を有しない人からの介護を多く受けられる時代となってきた。

表題の家族化の意味は、介護は家族・身内がすればよいとか、するものかどうかというような意味合いでは決してない。むしろ専門職として介護に携わるとき、それが仕事であり、自身の時間を犠牲にして提供するものではない。家族ではそこまではできない時間の提供ができることであり、更に専門的な介護の提供ができる仕事としての介護に加えて、家族であるからこそできる介護の内容をも実現することに他ならない。

介護施設における全ての環境の家族化は、現場の介護職だけに委ねるのではなく、事務職なども含め組織全体としてその環境の家族化を図る姿勢が重要なのである。介護が持つ二面性である、①家族が肉親に持つ“寄り添う優しさ”の実践と②専門職に求められる“難しい介護内容”をスマートにできる実践力こそが施設での家族化の意味なのである。介護を受ける人にとって、まさに家族からの介護であるかのように実感できることが、その人中心の介護の実践であり、個人の生きる喜びを紡ぐことにもなる。それこそがFamilization(家族化)である。

日進月異の“社会福祉法人の動向”と入所者の現況(85%が認知症)

社会福祉法人磯子コスモス福祉会が運営する特別養護老人ホーム「中原苑」には、現在100名の入所で、年齢は、54歳から105歳(平均年齢84歳)で、平均介護度は、3.9である。入所者100名の内、重度認知症は55名、中度から軽度認知症は30名、認知症でない(しかし多様な障害事由で自宅生活困難者である)方の15名が入所している。全体(定員100名)の85%が認知症状を呈している、ますます介護施設において具現化すべきは、施設におけるすべての環境の家族化(Familization)が必要であり、平成29年の社会福祉法改正に伴い、当法人の定款を全面的に改正し、第一条(目的)では二つの柱を掲げ施設運営をすすめている。

人がどのような状況になろうとも、①個人の生きる喜びを紡ぐことが大切であり、②その人中心の介護の実践が欠かせない。この①と②こそがこの法人の柱(定款)である。個人の生きる喜びを紡ぐ意味は、入所者(認知症)に寄り添うことはいうまでもなく、入所者・職員やそこに連なる家族の生きる喜びにも及ぶことを意味する。人的環境に限らず、施設を取り巻く環境も大切であり、施設内や施設周辺でも喫煙しないことを実現しており、喫煙者の採用はしていない。現在実施している施設の家族化・一体化の大きな改革であるが、介護専門職でない各課すべての専任職員が週2回(午前と午後の各半日)協働事業(コラボレーション)の一環として介護業務(ケア・ワーキング)に携わり、この協働事業を活用し勤務時間中に職員の体力づくり・健康維持増進に資する運動(後述のセラエクサ[®])の導入も計画し、また専任職員全員が認知症サポーターの認定講習を受講し、職員の有資格化も進行中であるが、各課職員にも、勤務時間中に実務研修を施設内で受講できる機会を提供し、介護福祉士の資格取得を可能としている。各課連携会議も開催し、施設全体が大きひとつの歯車のように一体的に動ける組織体制を構築している。もちろん、残業はなく、週の労働時間も40時間ではなく37.5時間であり、派遣社員や契約社員の採用はまったくしていない。諸会議も、勤務時間中の開催に限り、これらさまざまな運営ができるようワーキングシフトは、各課で調整し作成する形態を保っている。

すべての職員が介護そのものを広く理解し、施設全体が風通しの良い明るい職場になる環境づくり(家族化)を進めている。認知症に寄り添う介護の実践は、そこで働く職員のゆとりや余裕ある職場であってこそ実現できることであり、職員の処遇改善はもとより法人理事長の更なる決断とリーダーシップが求められることは論をまたない。

“レジャー・レクリエーションの視点”でみる、さまざまな「寄りそうケア」の実践

特別養護老人ホーム中原苑では、社会文化活動による季節感の提供(七夕の竹飾り、写真1)も施設利用者・職員間のコミュニケーション・連帯感の醸成と家族化に役立っている。加えて、自然・土に親しむ機会の提供(写真2)は、自身の楽しい過去の“体験の想起こし(回顧)”とともに、今の個人の生きる喜びも紡ぎ出している。認知症を有する人のみならず、すべての入所者に、体を使うこと、心を通わせること、頭を働かせることが重要であり、独自に創設したセラエクサ[®]のプログラムを導入している。セラエクサ[®]とは、セラピューティックエクササイズ[®]の略称で、自立している者のみならず、障がいや有する人や要支援・

要介護状態の人が、意図的・計画的な至適運動(身体活動)を中心に行うことにより、頭と心と体の積極的な健康の獲得・回復・維持・向上をはかる目的で行うエクササイズであり、その運動法である(図1)。当法人では、セラエクサ[®]資格講習会も同施設内で実施し、職員全員がセラエクサ[®]サポーターの資格を有している。

入所者も職員も皆家族の一員であることの“家族化(Familization)”に向け、個人の生きる喜びを紡ぐことに集中し、その人中心の介護の実践のより高い意識のもとに具現化できるよう、取り組んでいる。認知症に温かいそして心根の優しいケアを有するアットホームな施設にするには、職員一人一人の思いが欠かせない。認知症とともに生きる“家族化(Familization)の物語”を施設一体となって創りあげたいと切望している。



写真1 七夕の竹飾り



写真2 中庭の菜園



図1 セラエクサ[®]のスローガンと定義